

譲歩を表す分詞構文について

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

出縄 貴良

0. はじめに

分詞構文はしばしば、従属接続詞を用いた文からの書き換えで説明がなされる。従属接続詞を消去し、従属節の主語と主節の主語とが同一であればこれも消去し、従属節の動詞を現在分詞にするという説明である。このため分詞構文の文からは接続詞の情報が欠けているということになる。これについて安藤（2005：244）は「また、ときには…「時」と「理由」の二とおりにあいまいな場合も生じる。むしろ、あいまい性が分詞節の特徴であると言ってもよい」と述べている。

接続詞を省略するのが分詞構文の特徴であるが、接続詞が残る場合もある。このことについての安藤（2005：245）の説明は「分詞構文の意味は、接続詞を用いず、ただ論理的推論にのみ頼って意味解釈しなければならない以上、ときにあいまいである。そこで、意味が不明確になりすぎる場合は、分詞の前にwhen, while, though, onceなどの接続詞を付けて文意を明確にすることがある」というものである。

「あいまい性が分詞節の特徴である」のに「接続詞を付けて文意を明確にすることがある」というのはやや矛盾しているように感じる。また、仮にそうであったとしても「意味が不明確になりすぎる」というのはどのように判断しているのであろうか。先行文献には接続詞を用いた分詞構文の用例を挙げているものがたくさんあるが、どのように曖昧であるかや接続詞がないとどういった不都合な点があるのかといったことにはほとんど触れられていない。

上記のことを踏まえ、出縄（2014）では現在分詞構文の基本的意味を<同時性>とする早瀬（2002）を支持し、whenとwhileが残った分詞構文を研究した。その結果として、接続詞が残るのは意味を明確にするためだけではなく、接続詞を残さないと意図した意味にならない場合があるということを示した。

本論文はその延長であり、譲歩の意味の分詞構文、特にalthough / thoughが残った現在分詞構文について研究し、どうしてalthough / thoughが残ったのかということについて考

えていく。また、分詞構文は文頭・文中・文末に現れるが、本研究では文頭に現れたものを扱う。

1. 先行研究の概観

まずは分詞構文についての先行文献の記述を概観する。

1.1 譲歩を表す分詞構文について

分詞構文の譲歩についての文法書等の記述は大きく2つに分けられる。分詞構文が譲歩の意味を表すと明記しているものとそうでないものである。

早瀬（2002）もQuirk（1985）も分詞構文が譲歩の意味を表すことがあると述べている。また、その際には通常マーカーとなるものが必要だという点でも一致している。

A) 譲歩関係を示す分詞構文が因果関係を示す分詞構文と異なっている点は、前者で表現される2つの側面が世界知識に照らして互いに両立しにくいと考えられる種類のものであることだ…。同時に並行的に存在する2つの事態が互いに相反する両立しにくいものだという判断は、両立するという判断よりも有標であるため、nevertheless等それを明示化するマーカーが必要になってくるようである。

（早瀬（2002：172））

B) Except for *when* and *whereas*, the concessive subordinators may introduce *-ing*, *-ed*, and verbless clauses : … . The same types of clauses may also express concession without a subordinator though they then generally require a correlative conjunct to make the relationship clear :

（whenとwhereasを除いて、譲歩の従属接続詞は-ing節や-ed節や無動詞節が続くことがある…。同じタイプの節は従属接続詞がなくても譲歩を表すこともある。しかしその場合、関係をはっきりとさせるための相関接合詞が通常必要である。）（訳は筆者）

（Quirk et al.（1985：1097））

安藤（2005：243）は分詞構文（安藤は分詞節と呼んでいる）の意味区分の一つに〈譲歩〉を挙げ、*though*で書き換えられるとしている。安井（1996：522-523）も同様に、分詞によって譲歩を表すことができると記述している。江川（1991：345）は「条件・譲歩を表すこともあるが、例はきわめて少ない」と注記してはいるものの、分詞構文の譲歩の用法を挙げている。

以下、それぞれが記述している用例を示す。

- (a) *Not wanting to give offence, they did so all the same.*
 (怒らせたくなかったが、それでもやはり彼らはそのようにした。) (訳は筆者)
 (Quirk et al. (1985 : 1097))
- (b) **Sitting** (= Though I am sitting) *in the sun*, I still feel cold.
 (日だまりにすわっているのに、まだ寒い)
 (安藤 (2005 : 243))
- (c) **Admitting** (= Though I admit) *what you say*, I still think that you are in the wrong.
 (君の言い分は認めるけれども、やはり君はまちがっていると思うね)
 (安藤 (2005 : 243))
- (d) **Admitting** *what you say*, I still think you are mistaken.
 (あなたの言うことは認めるとしても、やはりあなたは間違っていると思う。)
 (安井 (1996 : 522))
- (e) **Admitting** (= Though I admit) *you have a point*, I still think I am right.
 (君の言うことにも一理あるが、やはり私が正しいと思う)
 (江川 (1991 : 345))

上記の例には (a) では *all the same*、(b) ~ (e) では *still* というマーカーが入っている。また5例中3例が *Admitting* を用いた例となっている。このことから、譲歩の分詞構文は多岐に渡るわけではないということが窺える。

このように、程度の差はあるが、分詞構文が譲歩を表すとしている先行文献は少なくない。一方で、分詞構文が譲歩を表すとは明記していないものもある。

- C) The meaning of the clauses is adverbial (reason, time, condition, manner …).
 (この節の意味は副詞的 (理由、時間、条件、様態…) である。) (訳は筆者)
 (Declerck (1991 : 457))
- D) Participle clauses can also be used in similar ways to full adverbial clauses, expressing condition, reason, time relations, result etc. (This can only happen, of course, when the idea of condition, reason etc is so clear that no conjunction is needed to signal it).
 (分詞節はまた、完全な副詞節と同じように使って条件、理由、時間関係、結果等を表すことができる。(もちろんこれは条件や理由等の意図がはっきりとしていて、そ

れを示すために接続詞が全く必要ないときにのみ使われる。)) (訳は筆者)

(Swan (2005 : 383))

分詞構文の意味を挙げる際に断定することはせず、含みを持たせてはいるものの、譲歩という表現は出てこない。DeclerckもSwanも分詞構文の例をいくつか挙げているが、譲歩の意味を表す分詞構文の例は挙げられていなかった。

上述したように、分詞構文が譲歩の意味を表すかについては先行研究によって異なり、統一されていない。分詞構文の意味に譲歩を明記しているものと、明記していないものがある。譲歩の意味を明記しているものの中でも時間や理由と同列に扱っているものもあれば、まれであるとするものもある。

1.2 接続詞が残った分詞構文について

分詞構文の考察に移る前に、接続詞が残った分詞構文についても確認しておきたい。一部上記で引用したものと重複するが、便宜上再掲している。

E) 分詞構文の意味は、接続詞を用いず、ただ論理的推論にのみ頼って意味解釈しなければならない以上、ときにあいまいである。そこで、意味が不明確になりすぎる場合は、分詞の前にwhen, while, though, onceなどの接続詞を付けて文意を明確にすることがある。

(安藤 (2005 : 245))

F) … While resemblingはwhile he *is resembling*とは言えないから…明らかに接続詞while (=though) の添加である。単に*Resembling his father in appearance*では(原則として「理由」の意味に解釈されて)文意が成立しなくなるから、それを避けるためにwhileを加えたと見るべきであろう。

(江川 (1991 : 346))

G) 分詞だけだと理由を示すこともある…ので、接続詞が加わると、その分だけ文意が明白になる。

(安井 (1996 : 523))

H) *-ing* clauses can be used after many conjunctions and prepositions. They are common with *after, before, since, when, while, on, without, instead of, in spite of, and as*.

(*-ing*節は多くの接続詞と前置詞の後で使うことができる。after, before, since, when, while, on, without, instead of, in spite of そしてasと共によく使われる。) (訳は筆者)

(Swan (2005 : 384))

I) The meaning of the clauses is adverbial (reason, time, condition, manner …). This adverbial meaning is often underscored by the addition of a conjunction or preposition.

(この節の意味は副詞的(理由、時間、条件、様態…)である。この副詞的な意味はしばしば、接続詞や前置詞を加えることによって明確に示される。) (訳は筆者)

(Declerck (1991 : 457))

分詞構文に接続詞が加えられることもあると記述するだけでその理由には触れていないものもあるが、文法書等によると分詞構文に接続詞が加えられるのは意味を明確にするためのようである。

これ以降、1.1と1.2で概観したことについてコーパスを用いて考察していく。使用したコーパスはBritish National Corpus (BNC) とCorpus of Contemporary American English (COCA) である。コーパスからの例文における太字、斜字、下線、日本語訳は筆者によるものである。

2. although / though + 分詞構文

まずは譲歩の接続詞although / thoughが加えられた分詞構文について考えていく。既に見たように、分詞構文に接続詞が加えられる理由は文意を明確にするためであるということであった。これについて出縄(2014)では、whenとwhileが加えられた分詞構文を扱い、この接続詞が加えられた理由が必ずしも文意を明確にするためではなく、分詞構文だけでは意図した意味が表せないために加えられている場合があるということを述べた。「あいまい性が分詞節の特徴である」(安藤(2005 : 244))のだから、譲歩の接続詞が残っている場合も同じで、文意を明確にする以外の理由があるのではないだろうか。コーパスを使うと以下のような例文が見つかった。

(1) Although eschewing the analysis prevalent in the traditional psychological novel, Sarraute's work nevertheless combines representation with reflexivity.

(伝統的な心理小説で広く行きわたっている分析を避けてはいるが、それにもかかわらずサロートの研究は表象と再帰性を組み合わせている。) (BNC)

(2) Although requiring modernisation the state rooms are still intact including their painted ceilings.

(現代風にする必要はあるけれど、大広間はペンキを塗った天井を含め未だに完全な

ままである。) (BNC)

- (3) Though increasing rapidly, plantation probably still occupies less than 18 million ha in the tropics (about 15% of the world's plantations), ….

(急速に増えてはいるが、プランテーションはおそらく未だに熱帯では1800万ヘクタール (世界のプランテーションの約15%) に達していない。) (BNC)

- (4) Although fighting the usual aches and pains of aging, he still sails, fishes, and skis.

(老化によるいつものうずきや痛みと闘っていたけれど、それでも彼は航海し、釣りをし、スキーをしている。) (COCA)

- (5) Though sweating in the ninety degree heat, he still found cause to sing under his breath.

(32度の中汗をかいていたけれど、それでも彼は小声で歌う理由を見つけた。)

(COCA)

(1) ~ (4) は全て、主節に早瀬 (2002) の言うマーカーが入っているが、分詞構文に接続詞が加えられている。下線を引いたneverthelessとstillがマーカーである。このマーカーによって文意はかなり明確なはずであるが、それにもかかわらず分詞構文にalthough / thoughが加えられている。

マーカーこそないものの、文意を解釈するうえで特に問題がないようなものでも接続詞が加えられていることがある。

- (6) Although using a road map, she managed to lose herself and so stopped to ask a young man the way.

(ロードマップを使っていたけれど、彼女は思いがけず道に迷ってしまったので若者に道を聞くために止まった。) (BBC)

- (7) Though lacking in prominent features, it is an interesting and lively place including two working farms in the centre of the village.

(突出した特徴は欠いているけれど、そこは村の中心に二つの農場のある興味深く陽気な場所である。) (BBC)

- (8) Though sparing her, the explosion killed a member of Parliament and four others.

(彼女は助かったけれど、その爆発で一人の議員とその他四人が亡くなった。)

(COCA)

(6) ~ (8) は、分詞節と主節の内容が相反する内容となっているため、接続詞が無くても理解には困らないのではないだろうか。文法書等が挙げている譲歩以外の分詞の用法で解

釈しようとしてみても不自然な解釈になってしまい、それほど無理なく譲歩の意味だと判断できる。これにより、「意味が不明確になりすぎる」ために接続詞が加えられたわけではない場合があるということが分かる。

では、なぜこれらの接続詞が加えられたのだろうか。次節で個々の例文の考察に移る。

3. 考察

膨大にある分詞構文の用例をすべて見ることはできないので、本稿では1.1で挙げた文献が提示している例文について考察する。

3.1 “Not wanting to ~”について

1.1で挙げた通り、Quirk et al. (1985) は、“*Not wanting to give offence, they did so all the same.*”を分詞構文の譲歩の例文として出している。このNot wanting toで始まる分詞構文であるが、BNCでは9例しかなくその全てが理由の意味と解釈できるものであった。COCAでは140例あったが、そのどれもが譲歩とは考えづらいものであった。

(9) Not wanting to offend, I gave them a try and ended up almost throwing the box away, but instead I put them aside in a small corner of my studio.

(怒らせたくなかったなので、試してはみたけれど、結局その箱をほとんど投げ捨てそうになってしまったが、そうせずに自分のスタジオの狭い角にのけておいた。)

(BNC)

(10) Not wanting to be too hasty and risk slipping, I made sure my footing was secure on each rung.

(急ぎすぎて滑り落ちる危険を冒したくなかったなので、私は全ての段で足場がしっかりしているかを確認した。)

(COCA)

(11) Not wanting to attract attention, I avoid their eyes.

(注目されたくなかったなので、私は彼らの視線を避けた。)

(COCA)

コーパスデータから分かることは、少なくとも“Not wanting to ~”という形で譲歩の意味になるということはほとんどないということである。とはいえ、接続詞を加えた例文はCOCAで1例しかヒットしなかったので、譲歩を表すには接続詞を加えればよいと簡単に判断することはできない。

(12) Though not wanting to endorse the ordination of homosexual persons, the judges nevertheless agreed that they could identify no clear ban on such action.

(同性愛者の聖職授与は認めたくなかったが、それにもかかわらず裁判官たちはそのような行為に対してのはっきりとした禁令はいかなるものも認めることができないということに一致した。) (COCA)

否定の形ではないwanting toで検索しても1例しか見つからなかった。

(13) Middle school students are at an awkward stage between innocence and maturity. Though wanting to exert their independence, they are not quite ready for it.

(中学生は無垢と成熟の間の難しい段階にいる。自立したいけれど、それほど準備ができていないのである。) (COCA)

用例が少ないため傾向を一概に述べることはできないが、(12) でもいわゆるマーカであるneverthelessとthoughの両方が現れていることは注目に値する。また、(12) と (13) のどちらも、thoughがなかったとしても分詞節と主節の関係から譲歩の意味を導き出せるはずである。それにもかかわらずthoughが加えられている。このことからやはり、although / thoughが加えられるのは「意味が不明確になりすぎる」や「文意が成立しなくなるから」という理由だけでは説明できないと思われる。

ではなぜ接続詞が加えられたのであろうか。早瀬 (2002) が述べているように、分詞構文の基本的意味は〈同時性〉であるから、互いに両立しにくいと考えられる譲歩の意味とは相性がよくないように思われる。そのため、そういった相反する事柄を並べるには譲歩の接続詞があった方がより自然だと考える。

この〈同時性〉という基本的意味は (9) ~ (11) で理由の意味として挙げた例文にも当てはまる。便宜上、理由の意味で訳したが、分詞構文自体にはそのような意味はなく、ただ主節で表されていることと同時に起ったことを背景的に述べているのである。例えば、(10) であれば、「足場を確認した」その時に「滑り落ちたくない」と思っていた、(11) であれば、「視線を避けた」その時に「注目されたくない」と思っていた、ということである。このように考えれば分詞構文を一つの大きな枠組みで捉えることができる。

3.2 “Admitting ~”について

それではもう一つ、admittingについて考えたい。これは複数の文献が用例として挙げていることから典型的な用法であると考えられる。実際に、コーパスからも次のような例文を

みつけることができる。

- (14) Admitting that the security forces were involved in a recent wave of kidnappings and murders of students, he said that his government did not have the means to combat the activities which had taken place over the past few months, ….

(治安部隊が最近の相次ぐ学生の誘拐や殺害に関与しているということは認めだが、彼は自分の政府が過去2,3ヶ月に渡って起こった活動と戦う手段がないと言った…)

(BNC)

- (15) Admitting that standard Newtonian dynamics works just fine on the scale of stars and planets, Milgrom suggested that Newton needed help at the scale of galaxies and galaxy clusters.

(標準的なニュートン力学は恒星や惑星の規模ではうまくいくということを認めただけ、ミルグロムは、ニュートンは銀河や銀河団の規模では助けが必要であると示唆した。)

(COCA)

一見するとadmittingが慣用的に使われ、「～は認めるけれど」という意味になるようにも思えるが、(16)のようにそうではない例文もある。ここでのheとはMacNamaraという人物で、イタリアからカナダに労働者を連れてこようと試みたが、最初の試みの後労働組合員からの抗議を受ける等して断念したという文脈である。

- (16) Admitting defeat, in early winter 1952, he cancelled further orders.

(1952年初冬、敗北を認め彼はさらに連れてくることを止めた。)

では、(14)、(15)のadmittingと(16)のadmittingは別物であろうか。両方とも〈同時性〉を表す分詞構文であると考えらるべきであろう。3.1で述べたように、主節の背景に「～を認めた」ということがあり、それが同時に起っているのである。しかし、admittingがnot wanting toに比べて譲歩のような意味で使われることが多いのは事実であるし、多くの文献が例として挙げている。それはなぜであろうか。これにはadmitという語の意味が関係していると思われる。

- J) to agree unwillingly that something is true or that someone else is right

(何かが正しいということ、または他の誰かが正しいということに不本意ながら同意すること)

LDOCE⁶

- K) If you **admit** that something bad, unpleasant, or embarrassing is true, you agree,

often unwillingly, that it is true.

(もし何か悪いこと、不快なこと、恥ずかしいことが真実であると admit するなら、多くの場合不本意ながらそれが真実であると同意することである。)

COBUILD⁷

そして用例の主節の動詞を見ると、(c) ~ (e) は全て think、(14) と (15) ではそれぞれ say と suggest である。これらは自分の意見を表す動詞と言える。つまり、何か意見を表し、背景ではそれと同時に不本意ながら何かを認めているという描写になる。あることを不本意ながら認め、同時に意見を述べているのである。この状況が譲歩の意味と合致するためにそのように訳されることが多いが、本質的な意味は同時に起こっているということである。

admitting の前に接続詞が残る場合があり、このことから admitting は完全な慣用表現ではないと思われる。

(17) Although admitting a "mistake," he tried to portray the breaking of the pledge as an act of courage...

(「間違い」を認めたけれど、彼は公約を破ったことを勇気ある行動と表現しようとした…)

(COCA)

ここまで分詞構文の基本的意味は〈同時性〉であり、それ自体に譲歩の意味があるわけではないと述べてきた。では、although / though が加えられるとどのような違いがあるのだろうか。これについては更なる研究が必要ではあるが、語が加えられたのだから、その語の意味が加わったとみるべきであろう。

L) used to introduce a statement that makes the main statement coming after it seem surprising, unlikely, or unexpected

(後ろに来る主要な発言を驚いたり、ありそうもないと思ったり、予想外であるというようにする発言を導入するのに使う)

LDOCE⁶

M) used to introduce a fact that makes another fact unusual or surprising

(別の事実を普通でない、または驚くべきことだとする事実を導入するのに使う)

Merriam-Webster

驚き等を表すために although / though を使うのである。いわゆる譲歩の意味の「~だけれど」や「~だというのに」にあたるものである。それに対して分詞構文だけの場合は、分詞節と主節の内容が同時に起こったということをただ表しているだけである。結果的には様々

な意味に解釈できるが、それは二次的な意味である。同時に起こりえないという気持ちが強くなればなるほど譲歩の接続詞の追加が必要になると考える。このように考えれば、although / thoughとnevertheless等が共起していることにも納得がいくのではないか。

4. おわりに

分詞構文の基本的意味を〈同時性〉として、譲歩の意味となる分詞構文とalthough / thoughが加えられた分詞構文について考察してきた。先行研究の中には「意味が不明確になりすぎる場合」には接続詞が加えられると述べているものもあるが、そうではないということコーパスの例文で示した。そして、although / thoughが加えられた場合は、その接続詞の意味である驚きや予想外という意味が加わり、分詞構文だけの場合は同時に起こったことを表しているだけであると述べた。本稿では一部の分詞構文の例を扱ったに過ぎず、更なる研究が必要である。しかし、従来言われてきたこととは異なる事例が存在するということが少なくとも示すことができたと思う。

参考文献

- Declerck, Renaat. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. 東京：開拓社. 1991.
- Poutsma, Hendrik. *The infinitive, the gerund and the participles of the English verb*. Groningen : P. Noordhoff. 1923
- Sinclair, John. *Collins COBUILD English grammar*. London : Harper Collins. 1990.
- Swan, Michael. *Practical English Usage. 3rd ed.* Oxford : Oxford UP. 2005.
- Quirk, Randolph et al. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman. 1985.
- 安藤貞夫.『現代英文法講義』東京：開拓社. 2005.
- 乾亮一.『英文法シリーズ15 分詞・動名詞』東京：研究社. 1954.
- 江川泰一郎.『英文法解説 -改訂三版-』東京：金子書房. 1991.
- 出縄貴良.「when/whileが加えられた分詞構文について」『東洋大学大学院紀要』第51集 289-300. 東洋大学. 2014.
- 早瀬尚子.『英語構文のカテゴリー形成 認知言語学の視点から』東京：勁草社. 2002.
- 安井稔.『英文法総覧』東京：開拓社. 1996.
- 山岡實.『分詞句の談話分析—意識の表現技法としての考察—』東京：英宝社. 2005.

辞書

COBUILD⁷: *Collins COBUILD Advanced Dictionary of English*. 7th edition. 2013. Boston :

National Geographic Learning

LDOCE⁶ : Longman Dictionary of Contemporary English. 6th edition, 2014. Essex : Pearson Education.

Merriam-Webster : Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary. 2008. Springfield : Merriam-Webster.

コーパス

British National Corpus (BNC) <<http://corpus.byu.edu/bnc/>>

Corpus of Contemporary American English (COCA) <<http://corpus.byu.edu/coca/>>

On Participial Constructions Connoting Concession

DENAWA, Takayoshi

The purpose of this paper is to examine participial constructions connoting concession and those preceded by the conjunction *although* or *though*.

Some grammar books state that participial constructions express concession, and some do not. Some grammarians observe that, when participial constructions are ambiguous in their meaning, certain subordinating conjunctions are used before them. However, this paper shows that it is not always true by adducing examples from corpora.

The present writer agrees with Hayase's (2002) idea that the basic meaning of participial constructions is "simultaneity" and argues that participial constructions in themselves do not have the concession meaning. Participial clauses just show the concurrence of events referred to by the clauses. When the events in the main clause and the participial clause are thought not to occur simultaneously, *although* or *though* needs to be added. In that case, the meaning of the conjunctions "surprise" or "unexpectedness" is expressed.